

高橋克彦

takahashi katsuhiko

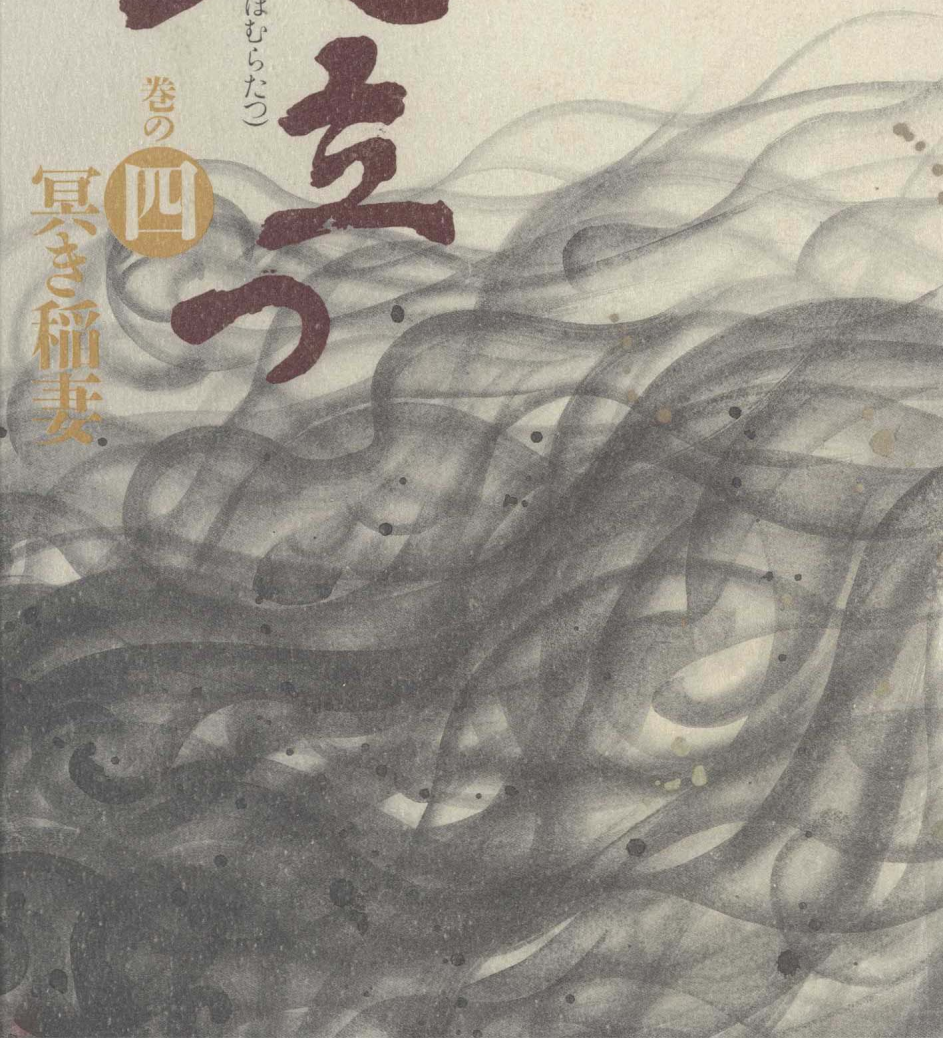
炎立ち

(ほむらたつ)

巻の

四

冥き稲妻



炎立つ

高橋克彦

takahashi katsuhiko

巻の

四

冥き稲妻

炎立つ 卷の四 ^{くら}冥き稲妻

1993年 8 月 31 日 第 1 刷発行

1993年 9 月 5 日 第 2 刷発行

[検印廃止]

著者 高橋克彦

発行 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41—1 郵便番号150

電話番号03—3464—7311

振替 東京 1—49701

印刷 大日本印刷株式会社 製本 株式会社石津製本所

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

㊄ <日本複写権センター委託出版物>

本書の無断複写（コピー）は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

©1993 Katsuhiko Takahashi

Printed in Japan

ISBN4-14-005177-9 C0093

炎立つ

巻の四

冥き稲妻

装画 中島千波

題字 山田惠諦

装幀 蟹江征治

協力 NHKエンタープライズ

目次

新星

5

火路

43

飛び火

105

崩壊

163

逆転

223

烈火

277

冥^{くら}き稲妻

323

成就

389

新 星

1

安倍一族が源頼義と清原武則との連合軍に滅ぼされて五年後の治暦三（一〇六七）年の夏、兄貞任と夫の藤原経清を戦乱で失った結有は、しかし、まだ奥六郡の衣川に留まっていた。だが、もはや藤原経清の妻としてではない。あろうことか、安倍を滅ぼした清原武則の嫡子である武貞の妻となつて日々を暮らしていたのである。女に戦さの罪はない。女はしばしば戦さの戦利品として扱われるのがならいの世ではあつたのだが、古くから結有を知る者たちにとっては不可解なことだつたに違いない。安倍の治世を懐かしむ者たちは、結有の変節を憎み、嘆いては衣川を捨てて他の土地へと移つて行つた。安倍の代わりに出羽からやつて来た清原一族に対する不満ももちろん大きかつたのだが、やはり結有の心変わりを許せない裏切りと見る者が多かつたのである。つまりはそれほど多くの血が流されたことの証明でもあつた。小松の柵から厨川の柵までの戦鬪で安倍軍は実に八千以上の命を失つたのだ。衣川に住む者で近親を一人でも失つていない方が珍しい。それだけの犠牲を払つたはずなのに、肝腎の結有は敵の将の妻となり、安閑とし

た日常を過ごしている。結有がどんな思いで暮らしているかは、彼らにとって無縁のことだった。その事実だけで充分に怒りの対象となり得たのである。

結有は孤立していた。

結有とてそれを承知している。

が、それを表に出す結有ではなかった。

知らぬ顔をしている限り、民の怒りが結有に直接向けられることはなかった。結有を妻に迎えた武貞は現在の鎮守府將軍清原武則の紛れもない後継者として目されている。結有を誹謗すれば命にも関わるのである。

それでも、陰口に戸は立てられない。

戦さの悲しみは薄れても、結有に対する怒りは消えることがなかった。

特に年老いた女たちは、何人かが顔を揃えろと決まって結有を口の端に乗せた。

夏の陽射しが厳しい。

今日も女たちが大道の片隅に固まって暑さを凌ぎながら安倍の昔を語り合っていると、白い土煙を上げて馬が三頭駆けて来た。町中を疾駆するのは触れて禁じられている。女たちは驚いて馬上の顔を確かめた。馬は瞬時にして女たちの目の前を通り過ぎた。馬上から憎々し気な罵声が発せられた。

「いい気なものじゃ……」

慌てて土下座した女の一人は、馬が遠ざかると鼻で笑った。

「ほんに。あれでは皆も浮かばれまい」

もう一人も溜め息を吐いた。馬上の男は結有の息子の清丸であつた。まだ十二歳の少年だが、気性の荒さは近隣に鳴り響いている。

「情けないことよ。母子揃つて人の心をなくしてしもうた。これでは衣川も終わりじゃ」
年長の女の言葉に皆は頷いた。

「あんな者らのために倅が厨川で死んだと思うと悔しうてならぬ。神も仏もないぞ」

「おおかた、また噂を聞き付けて血が上つたのであらう。それをやるならこの衣川の民を皆殺しにせねばなるまい。うつけじゃ。あの顔を見るだけで反吐が出るぞい」

女たちは暗い顔をして散った。

女たちの想像は当たっていた。

清丸は町外れの食い物屋の店先に馬を止めると馬上から声を張り上げた。

「あるじ！ 出て参れ」

周りには店が軒を並べている。たちまち人が道に溢れた。清丸はじろりと皆を見渡した。

「これは若さま。なにか不都合でも」

店の主人が口調だけは丁寧顔を見せた。清丸に従っている二人も十五、六の若者である。四十過ぎの主人には苦笑があつた。

「うぬはなぜ俺が来たか承知のはず」

「さて？ なんのことにござりましょう」

「昨日の昼に我が母上をなじった客があったと聞いた。それをうぬは見過ごしたであろう」

「ご冗談を。手前は知りませぬ」

「そのとき居合わせた者の言葉だ。うぬは笑って酒を勧めたと聞いたぞ。確かだな」

さすがに主人の顔色は変わった。

「衣川の町に暮らしながら、母をなじる者を笑って見過ごすとは許せぬ。今後の見せしめにいたす。やれ」

清丸はそれ以上の弁明も許さずに命じた。

二人の従者は馬から下りると、背中に背負^{しよ}っていた斧を振るって店を壊しにかかった。

「お待ちくださりませ！ 」

主人は懸命に清丸へ訴えた。清丸はその肩を馬上から蹴^{やぶ}って二人に続けさせた。周りの人々より擲^{やぶ}楡^うの声が上がった。清丸はその一人を睨^{にら}んで馬を進めた。

清丸は馬を下りて男の胸倉を掴んだ。

「もう一度はつきりと申せ。よく聞こえぬ」

「お許しを。なにも申しては……」

男には怯^{おそ}えが浮かんでいた。

「その舌を抜いてやろうか」

清丸は右手を上げて殴ろうとした。その右手がいきなり強い力で掴まえられた。

清丸は憤怒の顔で振り向いた。

「許してやりなされ」

清丸の腕を握ったまま相手は笑った。

「大叔父！」

清丸は乙那と知って破顔した。

「お気持は分からねでもないが……この者らは清丸どのに手向かいできぬ身。それを叩きのめしたとて、なんの自慢にもなりますまい」

乙那の言葉に清丸は涙を堪えた。

「情けのうござります」

二人きりになると清丸は涙を袖で拭った。二人は衣川を見下ろす丘に来ていた。

「母者の心が私には分かりませぬ」

清丸は顔を上げて乙那を見詰めた。その目から涙が溢れる。

「武士の道を外すなと母者は申しますが、その道を外しているのは母者の方です」

「ならば、なぜその母者と暮らしている？」

乙那は試すように質した。

「生みの親には違いありません。私が守らねば母者を庇う者が一人もおらなくなります」

「母者が憎いか？」

乙那は笑いを崩さずに訊ねた。

「哀れじゃ」

「ほう。哀れとう」

「あの大战さのときに、もし私がこの歳であつたなら、むぎむぎと今の辱めを受けさせることはなかつたはず。それが辛うござります」

「母者をその手で殺したと言うか」

それに清丸はこつくりと頷いた。

「そなたと母者を厨川から連れ出したのは儂ぞ。母者の心とは違ふ。恨むなら儂を恨め」

「それでも、清原に従うと決めたは母者でありましょう。大叔父のせいではない」

「それも我らの決めたこと」

乙那が言うとき清丸はみるみる青ざめた。

「嘘ではない。儂と、亡くなった儂の親父どのとで定めた。母者は喉を突いて死なんとした。が、そなた一人を残して死ねば経清どとの約束を違へることとなる」

「……」

「死ぬ方が遙かに楽であつたはず。経清どのを殺した相手に嫁ぐなど……地獄とてこれに較べれば温かい」

「嘘じゃ！　大叔父は私のために嘘をついている。母者は笑つて過ごしております」

清丸は言いつのつた。

「母者と会えば分かります。母者はもう昔の母者ではない。恨みもなにも忘れてしまつた」

「そなたに察せられるぐらいでは、敵を騙せぬ。母者は安倍一番の氣丈な女であつた。たとえ牢獄でも厭わぬ者ぞ」

「信じませぬ。まことそれほどに憎い敵と思うておるなら、子など生さぬはず。家貞を産む前に死んでおりました。家貞が生まれてからの母者は清原の身内となりました」

「女一人でなにができません。母者の頼みはそなたの成長ぞ。それにはまだ十年がかかる。子ができたとて耐えねばなるまい」

「大叔父は今の母者を知らぬ！」

「そなたこそ、母者の胸の底にある恨みを知るまい。経清どの源氏の手にかかり、無残にも鋸引きで首を落とされた。その上、貞任どのや重任どのの首と並べられ、都の大路に腐るまで晒されたのじゃぞ。しかも、通りすがりの者どもらに石を投げられ続けた。その恨みを簡単に忘れられると思うか？」

耳にして清丸はしゃくり上げた。

「戦さとはそうしたものの。首を晒されるのは致し方なしとは言うものの、源氏と清原の仕打ちはそれだけに止まらぬ。たつた十二歳の千世童丸^{ちよどうまる}どのまで首を刎^はねた。いかにも千世童丸^{ちよどうまる}どののは貞任^{さだとう}どのの嫡男^{ちやくなん}。生かしておいては後々に禍根^{かこん}を残すとの恐れからであろうが、自ら刀^{みづか}を捨てて降^{くだ}った者の首を即座に落とすなど、武士のすることではない。ましてや子供ではないか。他に道はいくらでもある。ただ一人源義家^{よしいえ}だけは千世童丸^{ちよどうまる}どのの命を救わんと嘆願^{たんがん}したらしいが、武則と武貞の二人が頑^{がん}として斬首^{ざんしゅ}を主張^{しやう}したと聞く。そういう者の許に母者は嫁いだのだ。覚悟のほどはそなたにも想像がつこう。武貞とて愚かではない。母者が喜んで嫁いだなどは信じておらぬ。あわよくば恨みを晴らさんとして近付いたと思つていたはずじゃ。その疑いを消すには武貞の子を産み、清原の者らと腹を割つて付き合わねばならぬ。でなければ嫁いだ意味がなくなる」

「厭^{いや}じゃ！ そんなにまでして生きて欲しくはありません。父上^{ちやうじやう}の名を汚^{けが}します」

清丸は手放して泣いた。

「母者一人でなにごできましよう！ 私はそんな母よりも、父上^{ちやうじやう}の後を追う母が欲しかった。昔の母はもうどこにもおりませぬ」

「母者のことなど小事と心得召され」

乙那は好きなだけ泣かせた後に言った。

「安倍がこれで終わるか、新たな火を燃やせるかは、すべてそなたに関わっておりますぞ。流された宗任^{むねとう}どののらも、ひたすらそれを願つて今を耐えておるのじゃ。皆、心を殺して先に思いを

託しておる」

乙那は宗任の顔を思い浮かべながら口にした。いったん厨川の柵より脱出した宗任たちは女や子供らが人質になってゐることを耳にして連合軍に投降したのである。いずれも死を覚悟してのことであつたが、意外にも頼義は彼らに対してその場での処断を行なわず、内裏の裁断に任せた。貞任と経清を葬つたことで安倍は滅びたと見たのだ。いや、それよりも頼義はすでにその先を見越していたのであろう。安倍の領土を源氏が引き継ぐとなれば、民の心を和らげるのが先決となる。それには寛大な処置こそ大事であつた。処断を内裏に預ければ直接の恨みが少しは薄れる。

その結果、宗任、正任、家任、則任ら兄弟を筆頭に良照、業近ら安倍の主だつた者たちは罪一等を減じられ伊予への島流しと定められた。朝廷に真つ向から齒向かつた十二年もの永い戦さと思えば、だれもが耳を疑うほどの裁決としか言い様がない。いかに非は朝廷側にあつたにせよ、まさか全員が死罪を免がれるなどとは……が、それも直後に内裏より発せられた論功行賞によつて納得がいつた。当然陸奥守の重任を命じられると思われていた源頼義に、位こそは引き上げられたものの、陸奥守の解任が告げられ、安倍の捕囚の監視という名目で伊予守への就任を促されたのである。一方、清原武則は戦さの功績がそのまま認められ、安倍の領地を継承すると同時に胆沢鎮守府將軍の地位が与えられた。そして、最も功績のあつたはずの義家は出羽守に回された。若い義家にとつて出羽守の役職は決して軽い昇進ではない。本来なれば誉れとも言える大任である。しかし、義家にすればなんとも不本意であつたに違いない。出羽守は鎮守府將軍の下に従う

のを義務付けられている。主従がそれで完全に逆転してしまう。乙那の目から見ても、これは明らかに内裏が源氏の台頭を恐れての人事としか思えなかった。頼義をそのまま陸奥に据えれば、いずれ武士の力が強大になるとの危惧が根底にあるのだ。と言つて、論功行賞をせねば内裏の支配力も弱まる。だからわざと安倍の者たちを許し、その監視という理由をつけて頼義を陸奥から強引に引き離した。清原武則を鎮守府將軍に据えたのは、清原が新たな内裏の敵とならぬようにとの配慮とも取れた。褒美も与えずに別の人間を陸奥守や鎮守府將軍として送り込めば、必ず戦いの種となる。いかにも権謀術数に長けた公卿の狡猾さが窺える配材だ。これで源氏の陸奥への野望は根底より断たれた。異を唱えれば今度は源氏が逆賊と見做される恐れとてあつた。内裏も固唾を呑んで頼義の出方を見ていたのであるが、さすがの頼義も後始末を理由に帰京を一年ほど延ばしただけで渋々と命に従つた。義家もまた出羽守の任官を堅く拒んで頼義と共に都へ立ち返つた。清原の下に連なる形で陸奥に残ることは源氏の将来にとって悪影響を及ぼすとの判断が加わつていたことは間違いない。やがて武門の棟梁たるべき身が俘囚の下にあつては全国の武士たちに示しがつかなくなる。こうしてすべてが治まつたとき、利を得たのは清原武則一人という結果となつて永い戦さが終わつた。内裏も頼義の恭順を確かめると、直ぐに宗任ら安倍の捕虜を、都からさらに遠く離れた筑前へ移動させた。このことから伊予への遠流は頼義封じが一番の目的であつたと察せられる。

内裏の公卿たちが恐れていたのは安倍ではなく、源頼義を棟梁とする武士団の結束にこそあつ